

イエメン・イスラーム史

その5

－前回までのあらすじ－

イエメンの自然は、海に多くの島々を持ち、また内陸部には多くの山々を持つ。イエメンは、海に囲まれたことから海外貿易の拠点となり、また内陸部ではその山岳地帯により人々に独自の部族社会を生み出させる要因となった。

このイエメンの大地は「幸福のアラビア」と呼ばれ、様々な王朝や首長国が勃興する。古くはマアーン王朝やサバア王朝が、そしてイスラーム教がイエメンに浸透した後、イエメンはその全土がほぼ統一され、その統一はウマイヤ朝を経てアッバース朝半ばまで続く。しかしカリフの座にマアムーンが就いた時期を境に、各地で反アッバース家運動が起こり、イエメンは現在も北部において多数を占めるザイド派の初代首長がザイド家の礎を築く等、各地で諸首長が乱立する時代に突入する。そして中世イスラーム世界の大国がイエメンに介入し、ファーティマ朝が「スライフ家」を擁立したり、アイユーブ朝やマムルーク朝が勢力を伸ばしてくる。そして16世紀から2度にわたるオスマーン帝国の支配下に入る。だが19世紀の終わりから英国が植民地主義の魔の手をアデンへと伸ばし、様々な影響を1967年の独立までイエメンに残したのであった。

イスラーム教下のイエメンでは、ヘジラ暦7年に預言者ムハンマドが、当時突出した支配力を有したヒムヤル人の首長であるアブドカッラール・アルヒムヤリーの息子達への書簡を送るところから始まる。イスラームの影響が強くなるに従い、イエメン各地の有力者達は帰順の意を表すために、預言者の元に向かう。その中でもハムダーン族のものは150名を越えるものであった。また預言者の元からはムアーズ・ブン・ジャバル等がイスラーム教をイエメン人達に教える目的で派遣されている。

ムズハジュからルハーウィ族の代表団が15名到来し、アルミルワーハという名馬を連れて来た。またキンダからは後にイスラーム史上に名を馳せるアルアシュアスが登場した。そしてハドラマウトからはワイル・ブン・ハジャルが来たが、彼は使徒をして、ジャーヒリーヤ（イスラーム以前の無明）時代の傲慢さを持つ者と言わしめた。またジャイシャーンの使節団長アブー・ワハブ・アッジャイシャーニーが「ビール」について使徒に尋ねるためにやって来た。

ナジュラーンのキリスト教徒達の内14名が使徒のもとを訪ねた。使徒はジズヤ（人頭税）を支払う多神教徒には3日間の猶予を与えて、改宗かさもなければ戦いかの選択を迫った。その結果彼等はイスラームに改宗したのである。またペルシャ系の民族も改宗している。特

にその首長であったバーザーン・ブン・アッティージャーはイエメン総督として使徒に任命される。こうして当時イエメンに存在していた様々な権威間の闘争が、イスラームの導入によって鎮静化していった。

ヘジラ暦10年にイエメンではアブラハ・ブン・カアブが、ハップ地方で反乱を起こした。彼はサヌアーでペルシャ系イエメン総督のバーザーンを殺害した。使徒は彼の反乱に対して全力を上げて鎮圧を図り、最後には暗殺を成功させる。またこの年、バーザーンが死亡したことにより、使徒はイエメンを3州（サヌアー、ジュンド、ハドラマウト）に分割して、各々に総督を任命した。しかしカアブの腹心であったカイス・ブン・アブドが新たに反乱を起こし、これをアルアシュアス・ブン・カイスとアマル・ブン・マウディーカルブが支援し、反乱は拡大していった。

使徒が死亡した後、「リッダ」と呼ばれる離反が、イスラームが広まった各地で起こり始めた。イエメンでは前述の反乱軍を鎮圧するために、初代カリフのアブー・バクルがアルムハージル・ブン・ウマイヤを指揮官としイエメンに派遣する。その反乱の首謀者の一人であったアルアシュアス・ブン・カイスは、イエメンの首長の一人であったジー・アルカラーウとの戦いに破れ、サヌアーとナジュラーンの間を放浪し、最終的に反乱の拠点であったハドラマウトに退避する。

アルムハージルが彼の地に進軍するとアルアシュアスはキンダ地方のアルヌジャイル城に籠城するが、結局包囲され降伏する。アルムハージルはアルアシュアスをカリフのアブー・バクルの下に送り、これによりイエメンの反乱は終結することとなる。カリフのアブー・バクルは、アルアシュアスを鞭打ち刑に処した後赦免し、彼の姉妹であり、アルアシュアスの妻でもあったファルワを彼に戻してやる。その後、彼は反乱の共謀者でもあったアマル・ブン・マウディーカルブと共にイスラーム史上で多大な勲功をたてることになる。

イエメンでの「リッダ」に関しては、ペルシャ人総督とその同調者のハムダーン族との戦いが主たるものであった。カイス・ブン・マクシューフの反乱により、ペルシャ系出自の人々は、アデンから海路または陸路によりイエメンから追放され、後にイエメンの統治はイエメン人の首長達が行うこととなる。

初代カリフのアブー・バクルは、ムハンマドが大シリア地方へ心向けられ、ムスリムとその家族を差し向けることを決意されていた、と人々の前で表明し、イエメンの人々にもジハード（聖戦）を呼び掛けるために、ウンス・ブン・マーリクを派遣した。

ウンスはイエメンにおいて戦闘員を集めることに成功し、イエメン人達は一族を引き連れてアブー・バクルの下に馳せ参じた。最初に姿を現したのはヒムヤル族のズー・アルキラーウの一族であり、彼等は白い鎧を身に付け、アラブ式の弓矢を持っていた。

しかしアブー・バクルは、彼等に出陣の命を下さなかったために、イエメンの人々は、メディーナで食料と飼料の欠乏に苦しみ、アブー・バクルに一刻も早い出立を求める。イエメン人達は対ローマのヤルムークの戦い、対イラクのカーディシアの戦いでそれぞれムスリム軍の前衛に立ち奮闘する。その後スペインのアンダルシア地方にまでイエメン人達は進出し、その痕跡が未だに各地に残っている。例えばグラナダの近郊のハムダーン城やセビリアのヤフシブ城等がある。

歴史家の中には、イエメン人達が戦利品と生活の向上だけを求めて戦線の離脱を図ったと言う者もいるが、イエメン人達は元来移住を好む性格であることを考慮すれば、かつて大シリアにガッサーン朝（ガサーシナ朝）（訳者注：1）やイラク南部にムナージラ朝（ヒーラ王国、ラハム朝）（訳者注：2）を築いた様に、カリフの命が無くとも移住は行われていたであろう。しかしこのイエメン人達の遠征は基本的にはイスラームの旗印の下に行われたものであり、宗教的信仰に身を捧げたのであった。そしてその際勃発した戦闘で得られた戦利品の獲得は副次的なものであった。

（訳者注：1）ガッサーン王国：イエメンのアズド族が3世紀初頭、ナバタイ王国をローマ人が滅ぼした後のヨルダン地方にやって来て建てた王朝。最盛期にはパルミラにまで勢力を広げたが、基本的にはローマ帝国の前線の衛星国であった。また637年に最後王が2代目カリフのオマルに「マリアの真珠」と呼ばれる宝物を献上したと伝えられている。

（訳者注2）ムナージラ朝（ヒーラ王国）：タヌーフ族の氏族であるラハム族が3世紀頃ユーフラテス川岸のヒーラを都として建国。ササン朝ペルシャの衛星国としてローマ帝国やガサーシナ朝と対立した。613年ホスローの勦気を被り、属領にされてしまう。彼等の大部分はネストリウス派キリスト教徒であった。また彼地はペルシャ文化をアラブに伝える窓口の役割も為し、古代のアラビア詩人達の憧れの地でもあった。

第2代目カリフのウマル・ブン・ハッターブは、イスラーム軍増強のためサイド・ブン・カイスをイエメンに派遣し、彼はメディーナに4000人のイエメン人達を率いて戻って来た。その他アルフセイン・ブン・ヌマイル・アックーニーを指揮官とするハドラマウトのキンダ族等がイラク方面での戦闘に参加し、目ざましい活躍をした。

また対イラクのカーディシアの戦いの後方で1700人の伴侶のいない女性達がイスラーム軍の支援に当たり、彼女達はナハア族やバジーラ族と婚姻関係を結んだ。ウマルの時代のイエメンの総督達は、初代カリフの時代の総督がその儘その座に就いており、以下の者達がいた。サヌアールではヤウリー・ブン・ウマイヤーそしてアルジュンドではアブドゥッラー・ブン・アビー・ラビーア・アルマハズミー等がいた。

ウマルの時代には、イエメン総督ヤウリーによるナジュラーンのキリスト教徒達の一掃の

出来事があったが、これは使徒の「アラビア半島に二つの宗教を存続させない」という遺言を実行したものであった。

ウマルは彼等が強制移住させられたナジュラーンの土地に関して、シリア地方とイラクの土地をもって保証した。彼等はその後この交換を後悔し、ウマルの元に来て、「我々に契約を無効にさせてくれ」と願い出たが、ウマルはそれを拒否した。また第4代カリフのアリーにも自分達をナジュラーンに戻すよう要求した。しかしアリーはそれを拒否して、こう言った「ウマルこそ、正しく物事を行った者だ。だから私は彼と違うことを好まない」と。

またウマルは、知事達に対して断固たる態度をとっていた。その中でイエメン総督ヤウリーをマディーナに召還したこの3つの事件があった。

第1の問題は、ハッフアーシュとマルハーンの一族の男が息子を殺害されたとヤウリーに苦情を申し出て来たことであった。ヤウリーは裁定後、殺された者の父親に刀を与えた。そして父親は死に至まで殺人犯を剣によって打ち据えたが、その彼は奇蹟的に息を永らえ、一族の者に治療を施され、とうとう回復した。或る日その父親は、彼が存命なのを知り、ヤウリーに再び訴えた。だが彼には剣の無数の傷があり、ヤウリーは父親に言った。「もしお前が彼をもう一度殺したいのであれば、お前は血の贖いが必要になる。さもなければ彼を放免しろ」。父親は怒り、ウマルの元に救いを求めた。ウマルはヤウリーにその問題についての釈明を求めた。ウマルはヤウリーを裁く事に関して（4代目カリフ）アリーに相談し、「ヤウリーは既に真実の裁定を下している」と言うアリーの言葉をもって、ヤウリーをイエメンでの職務に戻した。

第2の訴訟は、ヤウリーの兄弟であるアブドゥルラハマーンが一頭の牝馬を若い牝駱駝100頭分で買った事に端を発する。売買が完了した時に、売手は自分の馬が惜しくなりアブドゥルラハマーンに売買の取消を求めたが、彼は応じなかった。そこでウマルに救いを求めて来た。ヤウリーが事件について説明したところ、ウマルは彼に「これからは馬1頭について1ディナールで手に入る様に」と申し述べ、ヤウリーを職務に戻した。

第3の訴訟は、ヤウリーの軍長官が或る男を殴った事に端を発している。その男はウマルに来て苦情を述べた。ヤウリーはサヌアーから歩いてウマルの元に出向いて行ったが、その道中で新しい信徒達の長オスマーンの使者が彼と行き会った。使者はウマルの死をヤウリーに報じ、彼を今まで同様イエメンでの職務に任命する、という言葉を変えた。それでヤウリーはサヌアーに馬に乗って戻って行った。

また同様にオスマーンはイエメン諸州の知事全員をその儘その職務に任命した。ウマルの統治時代からオスマーンの統治時代の初期にかけて、イスラームの開放（征服）は諸地域へと拡大していった。その規模は、北はイラクのアルジャジーラ及びアルメニアまで、東は

ホラサーン及びサジェスターンまで、西はトリボリのビルカ（キレナイカ）及び北アフリカまで、南はエジプトとスーダンの間にあるヌビアまでに至った。軍人達には勝利を収めたムスリムとしての封土（イクターウ）と私有地が支給された。オスマーンはヘジラ暦30年に、歴史的な決意事項を公布した。「イスラーム開放戦線において勝利を収めた者は、遠く離れた故郷の所有地に代えて、今度定住した地域の新しい土地を所有する」。この決定の後、最早彼等は帰郷しようとは考えなくなった。

イエメンの各部族は、クーフアの地では、アルアシュアリーやアルバジャリーそしてアルアシュアスのそれぞれに、広大な封地が、聖戦の際の奮闘の度合いに応じて分与され、またバスラの地や他の地も分与された。一方大シリア地方はと言えば、ホムスの町の人々の軍隊は、キンダ族やヒムヤル族やハムダーン族等のイエメン諸部族であったし、同様にダマスカスの人々の軍隊の大部分を形成するのもイエメン人達であった。またアルアシュアリー族の人々はヨルダンのタバリアの軍隊の大部分であった。そしてエジプトのアルフスタートの諸地区におけるイエメンの諸部族は、キンダ族やヒムヤル族やキダーア族等であった。

オスマーンが殺され、第4代カリフのアリー・ブン・アビー・アッターリブが就任した時、彼はサヌア行政区にはウバイドゥッラー・アルアッバースを、アルジュンド行政区にはサイード・アルアンサーリーを任命した。

イエメン総督であったヤウリーはアリーを恐れ、イエメンから多くの財産を持ち出した。彼はイエメンから移動して来た直後、メッカでバスラへの途上であったアーイシャ達の一団と会いアリーからの離反を決めた。そして彼女とタルハ・ブン・ウバイドゥッラーとアルズベイル・ブン・アルワームに対して60万ディナールと600頭の駱駝を援助した。ヤウリーが彼等に援助したのは、ザカート（宗教的義務行為の喜捨）等の国家財産であり、アリーに支払われなければならぬ筈のものであったが、アーイシャ達はこれを軍資金としてアリーと一戦を交えることになる。

同様に大シリア地方ではオスマーンのシリア総督だったムアーウィーヤ・ブン・アビー・スフィヤーンがアリーに反抗していた。彼はイスラーム諸州全域において、アリーと覇権を争っていた。ムアーウィーヤはブスル・ブン・アルター・アルアーミリーをイエメン総督として送り、ブスルを長としてシリア地方から3000人の兵士達を付けてやった。

ブスルがサヌアに近づいた時、アリーのイエメン知事であったウバイドゥッラーはサヌアやそれ以外の町の顔役達を集め、彼等に戦いを促す演説をし、ムアーウィーヤの任命した総督に抵抗した。しかし人々は、ウバイドゥッラーへの支援を差し控えた。ウバイドゥッラーは彼等からの支援の望みを断ち切られたので、アムルを自分の代理とし、自分の2人の息子のアブドゥルラハマーンとカシムをアブドゥルマダーン族に属する母方の叔父に預け、

アリーの元へと戻っていった。

ブスルはイエメンで影響力を伸ばした。そしてウバイドゥッラーが残した2人の息子と代理人アムルまたアブドゥルマダーン族の男達を殺す等、様々な流血事件を引き起こした。

アリーはブスルを追放するために、ハーリサ・ブン・カダーマ・アッサーディーを長とし、4000人の騎馬隊を付け派遣した。ブスルはイエメンから逃げたが、彼の支援者達や彼に従う大勢の者達はハーリサに捕らえられ、その大部分は殺害された。

イエメン人達はブスルの2人の子供がメッカの近郊にいることを察知し、ウバイドゥッラーの2人の息子をブスルが殺害した罰として殺した。

イエメンとヘジャーズ地方及びイラクとホラサーンの人々はアリーの支援者であった。一方大シリア地方の人々はムアーウィーヤの支援者であった。イエメンの外にいたイエメン人達は、アリー派とムアーウィーヤ派に分かれていた。ハムダーン族やマズハジュ族は凡そアリー派に属し、ヒムヤル族やアッカ族そしてアルアシュアリー族はムアーウィーヤ派に属していた。イエメン人のアルアシュタル・アンナフィーはアリーの軍団の右翼の将軍であったが、エジプトに向かう途上で謀略により毒殺された。またヒムヤル族のズー・アルキラウ・アッスメイフィウ・ナコールはムアーウィーヤの軍団の右翼の将軍であったが、アリーとムアーウィーヤの間で交わされた戦闘の一つで殺された。

イエメン人達はこのような分裂により、お互い殺し合いを始めた。アリーは自分の教友達を自らのカリフ職の正当性を論拠に奮起させた。ムアーウィーヤは自分の教友達をオスマーンの血の贖いを要求する、という名目に基づいていた。2人との間の戦闘は、アリーがアブー・ムーサー・アルアシュアリーとアマル・ブン・アルアースの仲裁を強いられるまで続き、アルアシュアス・ブン・カイス・アルキンディーはヘジラ暦37年サファル月に仲裁書を読み上げた。その仲裁書の証人は9名であったが、その内6名はイエメン人であった。アリーの軍隊は、仲裁の直後に解体され、また仲裁に満足しない隊は、アリーの軍隊からクーファの近郊のホルラーウという村へと離脱し、彼等はその日から、アルハワーリジュ派とかアルホルーリイヤ派として知られる様になり、後にアリーはアルハワーリジュ派のアルムラーディー族のイブン・マルジムの手によって、ヘジラ暦40年に殉教させられた。

信者達の長アリーが殉教してからは、ムアーウィーヤが支配権を握り、アリーの息子のアルハサン・ブン・アリーがムアーウィーヤに降伏した。ムアーウィーヤはイスラーム諸州全てに自分の総督を派遣した。以下はウマイヤ朝下の歴代カリフとそのイエメン総督のリストである。

ウマイヤ朝 H41-132/AD661-750

イエメン（サヌアー、ジュンド州）総督

H41/AD661年ムアーウィーヤ I 世（イブン・アビー・スフィヤーン）

1. オスマーン・ブン・アッファーン・ブン・アッサカフィー
2. アタバ・ブン・アブスフィヤーン（ムアーウィーヤの兄弟）
3. ムアーウィーヤの直轄。代理人としてファイルーズ・アッダイラミーを置く。
4. アンナーマーン・ブン・バシール・アルアンサーリー
5. バシール・ブン・サイド・ブン・アルアアリジュ
6. サイド・ブン・ダーザワイヒ・アルファーリシー
7. アッダハーク・ブン・ファイルーズ・アッダイラミー

H60/AD680年ヤジード I 世

8. ブハイル・ブン・リーシャー・アンニムヤリー

（H64/AD684年ヘジャーズ及びイラクに勢力を拡大したアブドゥラー・ブン・ズバイルにヤジード I 世が降伏する。これにより H73/AD693年にアブドゥラーが殺害されるまで、イエメン総督はアブドゥラーにより任命される）

H64/AD683年ムアーウィーヤ II 世（イエメン総督を任命出来ず）

H64/AD684年マルワーン II 世（イエメン総督を任命出来ず）

9. アッダハーク・ブン・ファイルーズ・アッダイラミー
10. アブドゥラー・ブン・アブドゥルラハマーン・ブン・ハーリド・ブン・アルワリード
11. アブドゥラー・ブン・アブドゥルムッターリブ
12. ウバイダ・ブン・アズバイル
13. ハサン・ブン・アブドゥラー・アルファキーフ

その後短期の代理者が続く。

H65/AD685年アブドゥルマリク

（アズバイルを殺害したアルフッジャージュ・ブン・ユーセフ・アッサカフィーがイエメンを任され、彼は代理人として兄弟をサヌアーに派遣する）

14. ムハンマド・ブン・ユーセフ

H86/AD705年アルワリード I 世

15. アイユーブ・ブン・ヤヒヤー・アッサカフィー（アルフッジャージュの従兄弟）彼は、サヌアーの大モスクの増築をアルワリード I 世に命じられる。

H96／AD715年スレイマーン

H99／AD717年ウマル・ブン・アブドゥルアジーズ

16. アルワ・ブン・ムハンマド・ブン・アッサディ

H101／AD720年ヤジードⅡ世

17. マスウード・ブン・アルフ・アルカルビー

H105／AD724年ヒシャーム

17. マスウード・ブン・アルフ・アルカルビーがヒシャームの治世の半ばまでイエメンを統治

18. ユーセフ・ブン・ウマル・アッサカフィー

19. アッサルト・ブン・ユーセフ・アッサカフィー（上述の総督の息子）

H125／AD743年アルワリードⅡ世

20. マルワーン・ブン・ムハンマド・ブン・ユーセフ・アッサカフィー

H126／AD744年ヤジードⅢ世

21. アッダハーク・ブン・ワーシル・アッシクシキー

H127-32／AD744-50年マルワーン・ブン・ムハンマド

22. アルカーシム・ブン・アマル・アッサカフィー

ウマイヤ朝最後のカリフ、マルワーンは増大する反逆者達との抗争に奮闘し「ロバのマルワーン」と仇名された。歴代カリフの中でも非常に有能な人物であったが、時既にウマイヤ朝に味方せず、彼はエジプトのファイユーム村落の一つブーシールでアッバース朝の兵士に殺害され、ここにウマイヤ朝はその幕を下ろす。

イエメンでは彼の治世中に「真理を求める者」と号したハドラマウト系のアブドゥラー・ブン・ヤヒヤー・アルキンディーが反乱を起こしていた。今回は彼の反乱から歴史が展開していく。

イエメンにおける「真理を求める者」、 アブドゥラー・ブン・ヤヒヤー・アルキンディー・アルハドラマミーの革命

「真理を求める者」と号したアブドゥラー・ブン・ヤヒヤー・アルキンディー・アルハドラマミーが指導したこの革命に関しては（注1）、ウマイヤ朝に対して発生したものの、その活動はアッバース朝とは関係の無いものだった。前述のアブドゥラー・ブン・ヤヒヤーは、イ

イエメンにおけるハワーリジュ派の中のイバーディー派の指導者であった。イエメンは、バスラを中心地としたイバーディー派の運動の支部であった。アブドゥラー・ブン・ヤヒヤーは、バスラにいた同派の指導者達に運動を起こす許可を求めていた。彼等は彼に対して許可を与え、彼を支援するために彼等の中の一部を彼の元へ派遣した。その中には、アブー・ハムザ・ブン・アルムフタル・ブン・アウフィン・アルアズディ・アルアスラミーとブルジュ・ブン・ウクバ・アッサクリーがいた。

(注1) : 「歴史における決定的な諸戦闘」 ハムザ・アリー・ルクマーン P.33引用要約

我々は、ハドラマウトの人々が特にハワーリジュ派の中のイバーディー派に参加したことの動機に関して質問することが出来るだろうか (注2)。私見に依ると、イエメンの国はハドラマウトも含め、ウマイヤ朝の時代には経済的状況は良くなり、ハドラマウトの人々はウマイヤ朝支配に反対するグループの支援に目を向けていた。彼等はハワーリジュ派の原理の中に彼等の長年の希望を見出だした。と言うのは、ハワーリジュ派は、カリフの座とは自由人であるムスリム個々が持っているものである、と見做していたからである。この事に依って、ムスリム個々はカリフの座に就くチャンスが与えられるからである。つまりカリフがイエメン人になるかもしれず、その人物がウマイヤ朝の圧制から彼等を自由にし、彼等の経済的なレベルが上昇するために早急に努力するかもしれないのであった。

(注2) : 「イスラーム下のイエメン」 P.65

そして状況がどうであれ、アブドゥラー・ブン・ヤヒヤーはアブー・ハムザ・アルムフタルに次の様に言った。「良い言葉を聞きなさい。そうすれば真実を呼び掛ける事になるであろう。また私と共に出発せよ。と言うのは、私は自分の民の中で、神に従わされている者であるのだから」。

アブー・ハムザはイブン・ヤヒヤーの呼び掛けに呼応し、ハドラマウトへと彼と連れだつて行った。彼は人々に対して、彼の宗派へと、またヤヒヤー・アルキンディがカリフであり、忠誠を誓いそしてウマイヤ朝に離反し、マルワーン・ブン・ムハンマドを退位させる事を呼び掛けた。

ハドラマウトの人達は彼の呼び掛けに呼応し、彼等はイブン・ヤヒヤーに対してカリフとして忠誠を誓い、そして彼の事をターリブ・アルハック (真実を求める者) と敬称した。彼等はウマイヤ朝のイエメン総督であったイブラヒーム・ブン・ジブラ・アルキンディを除いた。(この事は原典に記載されている事と相違ない)。

ヘジラ暦129年ターリブ・アルハックは、ハドラマウトを占領することで、彼の運動を開

始した。即ち彼地にあった総督邸を攻撃し、ウマイヤ朝のハドラマウト総督であったイブラヒム・ブン・ジブラ・アルキンディを捕虜にした。それから彼をサヌアーへ放逐し、直ぐ様サヌアーへ向けて、彼の下に集まって来た者達と共に進軍し、ウマイヤ朝のサヌアー総督であったアルカーシム・ブン・アマル・アッサカフィーを敗走させ、彼の兄弟のアッサミト・ブン・ユースフ・アッサカフィーを戦死させた後、サヌアーを占領した。それからほぼイエメン全土に彼の影響力を伸ばし、その諸行政区に彼の総督を派遣した。そして彼のイエメンに対する統治は1年4ヶ月に及んだ。

サヌアーを占領後に、サヌアーの大モスクの説教台から次の様な説教をしている。即ち「人々よ、我々は汝達に神の書と預言者のスンナ（奨励行為）に呼応する者達の返答を呼び掛ける。イスラームは我々の宗教であり、カアバは我々の礼拝の方角であり、クルアーンは我々のイマーム（導師）である。

我々はハラール（神に依って合法的と見做された行為）に満足しており、その代替え物を望んではない。そしてそれを僅かの代価でもって買う事もしない。我々はハラーム（神に依って禁止された行為）を拒否し、我々の背後へと追いやってしまった。我々は汝達にクルアーンの義務を、裁定された神の章句を、そして規範とされるムハンマドの言動を呼び掛ける。

我々は、神が約束された事に対して誠実であられ、裁定された事に関して公正であられる事を証言する。そして神の唯一性、その約束事と威喝に関して確実である事、また神の敵に対する敵愾心を呼び掛けるのである。

人々よ、神の慈悲には次の様なものがある。即ち神は個々の期間にこの世で残った者達をして、正しき道から外れた者達に呼び掛け、神の側で痛みに耐え忍び、真実のために殉教者として死なせる様に成さしめたのである。殉教者の神は彼等の事を忘れず、汝の神も忘却の方ではない。

我は汝等に対して、神を恐れ、神が汝達に対して遂行を託された事を上手く成し遂げん事を助言する。神が命じられた事や神を想念する事に於いて、神に対して良き振る舞いを示せ。我と汝達とに、神の許しを請いながらこの事を述べるのである」（注3）。

（注3）：「歴史における決定的な諸戦闘」 ハムザ・アリー・ルクマーン P.33引用要約

アブドッラー・ブン・ヤヒヤー・アルキンディは、前述のアブー・ハムザ・アルムフタール・ブン・アウフ・アルアズディを指揮官とし、イエメンからメッカへの軍隊を準備した。そして彼に対してアラファの日（メッカへの大巡礼の期間の2日目）に彼の攻撃部隊を率いてアラファト（メッカ郊外の大巡礼への参加者達が集結する地点）に到着する様に命じた。

また、彼の攻撃部隊と共に人々の頭上で槍の矛先に旗を掲げさせ、ウマイヤ朝に対する革命を公表するように決定した。

そして実際にアブー・ハムザは彼に命じられた様に遂行した。事態は大巡礼の犠牲祭の日々の最後の日まで、メッカとメディナの総督であったアブドルワーヒド・ブン・スレイマーン・ブン・アブドルマリクと彼との間で休戦協定を締結せざるを得なくなってしまうた。

そして休戦協定の終了が定められた日に、前述の総督がメディナへとメッカを去った後アブー・ハムザ・アルムフタールはメッカへと入城した。メッカの総督はムフタールに対抗する軍隊をメディナから準備したが、両者の戦いは、前述のメッカとメディナの総督が敗北したことで終結した。

ヒジュラ暦130年の第2月サファル月に、アブー・ハムザ・アルムフタールはメッカにおいてアブラハ・ブン・アッサバーハ・ブン・アブドルラハマーン・アッシドフィーを彼の代理に任命し、彼自身はメディナに向かう軍隊の指揮官として進軍し、メディナへ入城したが、それは前述の総督のアブドルワーヒド・ブン・スレイマーンがメディナから出て行った後のことであった。

アブー・ハムザ・アルムフタールはメディナにおいて、神の使徒のモスクのミンバル（説教台）に登り、ウマイヤ朝に反対するイバーディー派が起こした革命の政策と目的を明らかにした説教をし、彼はメディナを4ヶ月間統治し、人々に善政を施した。

この後アブー・ハムザ・アルムフタールはメディナから大シリア地方に向けて軍を進撃させる用意を整え、その将軍にバルジュ・ブン・オクバを任じた。ウマイヤ朝の首府ダマスカスを占領するのが狙いであった。アブー・ハムザはこの行動を起こすことによって、危機に突入するに及び、来るべき日々が彼に明らかにする結論を待てなかったのである。

それにも拘らずウマイヤ朝のカリフは、アブー・ハムザ・アルムフタール軍の進撃を待たずに、アルムフタールとメッカ、メディナにいたイバーディー派を駆逐する為、アブドルマリク・ブン・ムハンマド・ブン・アティーアト・サアディーを将軍に立て、大軍を編成したのであった。

ウマイヤ朝の軍隊はイバーディー派の軍隊とメディナと大シリア地方の中間に位置するクラー涸谷で対峙する事になり、ウマイヤ軍がイバード軍に対し勝利する事になった。ウマイヤ軍はメッカに進撃を続け、ついにアブー・ハムザ・アルムフタールを敗死させ、メッカに入城した。ウマイヤ朝はメッカとメディナに権威を再確立した。この後イバーディー派の影響力が残るイエメンに進撃を続け、これを根絶し、ウマイヤ朝の影響力の奪還を狙った。偶然にもウマイヤ軍はターイフの辺りで、アブドラー・ブン・ヤヒヤー・アルキンディーと遭遇したのであった。アルキンディーはアブー・ハムザ・アルムフタールの復讐を果たす為

に、軍の指揮官として、イエメンから進軍してきたところであった。

ウマイヤ軍とアルキンディ軍の対決は、アブドッラー・ブン・ヤヒヤーの戦死と彼の軍隊の敗退をもって終息した。アブドルマリク・ブン・ムハンマド・ブン・アティーアト・サアディーはイエメンに進軍を続け、ついにサヌアーへ入城するのであるが、語る程の抵抗も受けなかった。

以上はヒジュラ暦130年内の出来事であった。サアディーはサヌアーにウマイヤ朝の権威を確立したのであった。サヌアーには、従兄弟のアブドルラハマーン・ブン・ヤジード・ブン・アティーアを代理として置き、サアディー自身は軍の統率者として、イエメンにおけるイバーディー派の根拠地であったハドラマウト地方に進撃した。そしてサアディーはこの地方にもウマイヤ朝の威光を取り戻す事が出来た。

この後彼はサヌアーへ戻り、暫く滞在した。そしてカリフのマルワーン・ブン・ムハンマド（マルワーンⅡ世）がサアディーにヒジャーズ地方への進軍と共に、人々を引き連れて巡礼に赴くように命じた。サアディーはサヌアーに前述の従兄弟のアブドルラハマーン・ブン・ヤジード・ブン・アティーアを代理人に立て（注4）サヌアーを出て、ヒジャーズへ向かった。

（注4）：「イエメン・イスラーム史」 Dr. ムハンマド・アミン・サーリフ P.69

イエメンのムラード県に着いた時、イバーディー派の襲撃に遭った。その中にはジャマーナトやサイド・アブー・アルアフナスという人物等が居た。彼等はサアディーの殺害に成功し、アブドッラー・ブン・ヤヒヤー・アルキンディやアブー・ハムザ・アルムフタル等イバーディー派の人々の死に報いる事が出来た。アブドルマリク・ブン・ムハンマド・ブン・アティーアト・サアディーは、これ等の人々を死に追いやった張本人であったのだ。

サヌアーの代理であったアブドルラハマーン・ブン・ヤジード・ブン・アティーアは彼の叔父の殺害を知ると、彼は狂乱激怒した。そして大シリア地方の人々の中の騎馬軍として有名だったシュアイブ・アルバーキーにイバーディー派が何処に居ようが、彼等の殺害と、彼の叔父のアブドルマリク・ブン・ムハンマド・ブン・アティーアト・サアディーの復讐を託した（注5）。

（注5）：「イエメン・イスラーム史」 Dr. ムハンマド・アミン・サーリフ P.69

そこでアルバーキーはイバーディー派を粉砕し、彼等の中で彼が殺害しなかった者は何人たりとも見出だし得なかった。女子供に至まで彼に襲われた者は助からなかった。そして彼は彼等の財産を占有し、彼等の村々に破壊と殲滅をもたらした。そしてイバーディー派が見つけ出された所では何処でも彼等を追撃し、殺害し始めた。ひたすら身を隠す事に専念した

者達を除いて、イバーディー派の者達の中で彼に襲撃された者は助からなかった。

前述の代理人であったアブドルラハマン・ブン・アティーアは、カリフのマルワーン・ブン・ムハンマドを通じてイエメンの総督としてアルワリード・ブン・アルワがやって来るまで、サヌアーに滞在した。このアルワ・ブン・ムハンマドの時代にカリフのマルワーン・ブン・ムハンマドが殺害された。彼はエジプトのアルファイユムの村の一つであったブーシール村で、アッバース朝の兵士の一人の手に掛かったのであった。そして彼によりウマイヤ朝は終焉を告げ、アッバース朝がその廃墟の上に成立する事となる。イエメンは、イラクにおける全イスラーム州の新しい王朝の中心地バグダードに従属するイスラーム州の一つになった。

ところでイバーディー派は幾多のハワーリジュ派の一分派であり、最も穏健であった。この基礎を築いた人物はアブドラー・ブン・イバード・アルハーリジーであり、彼はヘジラ暦85年に死去している。この宗派はバスラ、イエメン、オマーン、イラクのアルジャジィーラ、カルマーン、そしてサジュスターンに本拠地を構成していた。そしてハワーリジュ派の諸分派は、(アリーとムアウィーアの) 仲裁の決定後、アリーから離脱した人々から更に離脱した者達と名付けられた。アリーは彼等と戦い、イラクのナハラワーンにおいて「ナハラワーンの日(658年)」と呼ばれる出来事に彼等を追い込む事になる。そして彼等は周知の如く四散するのである。その日以降彼等は分立し、イスラームの諸地方に分派や拠点を構成するのであった。

ーアッバース朝初期からアッバース支配に対する独立運動開始までのイエメンー

ヒジュラ暦132年、西暦750年のアッバース朝の始まりからカリフのマアムーンの時代にイエメンで起こったアッバース朝統治に対する独立運動の開始に至までのイエメンにおける彼等の行政は、総督の頻繁な交替政策を辿る事で特徴付けられる。着目すべき事は、彼等がその政策を次の様に評価していた事である。即ちそれが、イエメン人達を満足させる要因となり、イエメンにおいての彼等の統治に対する抵抗運動の再燃の抑圧に効果的で、彼等即ちアッバース家カリフ達の為の予防手段となり、総督達はその任地に密着しない様にとの考慮からであった。

アッバース朝統治に対する抵抗運動は、ヒジュラ暦3世紀に成功を収めた独立運動の最初の種子となった。その事については後述する。

さてイエメンのアッバース朝の総督達列举しよう。(注1)

(注1) : 「[铸造された黄金](#)」 [アルハズラジー](#) P.24

ダーウード・ブン・アブドルマジード・ブン・アブドルラハマーン・ブン・ザイド・ブン・アルハッターブ・アルアダウィ・アルカラシー。

彼はダーウード・ブン・アリー・ブン・アブドッラー・ブン・アルアッバースを通してイエメンの総督に任命された。そして彼の統治下にイエメンをおいたのはアッバース家の最初のカリフであったアブー・アッバース・アッサファーフであった。前述のダーウード・ブン・アブドルマジード総督は、サヌアーの大モスクに門を造ったのだった（注2）。それ以前にはそこに入るのに正門以外に門は無かった。だが着任後たった5ヶ月でダーウード・ブン・アブドルマジードは、殺害されたのか否かは定かではないが、世を去った。

（注2）：「鑄造された黄金」 アルハズラジー P. 24

彼の後任として、カリフのアブー・アッバース・アッサファーフはサヌアー及びその周辺の行政区の総督としてムハンマド・ブン・ヤジード・ブン・アブドッラー・ブン・ザイド・ブン・アブドルマダーン・アルハーリシー・アンナジュラーニーを任命した。

そして彼の兄弟の一人をアデン及びその周辺の行政区の総督として任命した。歴史家達は、この二人は振る舞いが悪く不明瞭な状況下で同じ日に死去した、と述べている。

彼の後任として、カリフのアッサファーフは、アバウドッラー・ブン・マーリク・アルハーリシーを任命したが、彼はたった4ヶ月後直ぐ様、アリー・ブン・アッラビーア・ブン・アブドッラー・ブン・アブドルマダーン・アルハーリシー・アンナジュラーニーを任命した。彼はサヌアーの大モスクに増築を成している。そしてクーフィ書体で彫られた石には、次の様に記されている。「慈悲深く慈愛あまねく神の名の下に、アッラーこそが唯一の神であり、彼に並び立つものはいない。彼は、たとえ多神教徒達が忌み嫌おうが、全ての宗教を凌駕すべくこの真の宗教を具現化するために、正しい道と真の宗教を携えさせ、彼（ムハンマド）を送り込んだのである。

アルマハディー・アブドッラー（即ちカリフのアブー・アッバース・アッサファーフ）は総督であるアリー・ブン・アッラビーア、神が彼に榮譽を与えん事を、の手により、諸モスクとその建造物の修復を命じた。ヘジュラ暦136年。モスクの修繕にアルマハディーが支払いをなした善行を神がこれからも誰かになさしめんことを」（注3）。

（注3）：「イスラーム下のイエメン」 Dr. イサーム・アッディーン・アブドルーフ・アルファッキー
ー P132

このアリー・ブン・アッラビーア総督の時代に（注4）、ペルシャ人達とサヌアーの人々と

の間でハマー（保護区）・アッラハバを巡って諍いが生じた。アッラハバ周辺の土地の所有者達の中にナジュラーン出自のマズハジュ系アブドルマダーン族がいたが、彼等はナジュラーンからサヌアーへ移動して来た人々であった。

時を同じくして、イエメン人達の要望に呼応して、サイフ・ブン・ジー・ヤズィンを指導者とするペルシャ人達の一団がやって来た。またこの時にサアダ地方からサヌアーへとヒムヤル系のシャハーブ族がやって来て、彼等はアブドルマダーン族と共に前述のハマー・アッラハバを巡ってのペルシャ人達との諍いに加わった。

ペルシャ人達は聖なる預言者のハディースを例証に取り上げて彼の地を防衛した。即ち預言者はハマー（保護区）を女性の勤労者や妊婦そして羊のためのものにしたのである。そして預言者がそれについて次の様に語っている事も例証となるのである。即ち彼はその灌木の茂みに手が入る事を禁じた、のだった。初期のイスラーム教徒達はこの事を守り、それから後に人々はそれを伐採したり薪にしたのだった。

（注4）：「イエメン・イスラーム史」Dr. ムハンマド・アミーーン・サーリフ P. 117

ペルシャ人達とマズハジュ系のアルハーリス・ブン・カアブ族、彼等の中にはアブドルマダーン族やヒムヤル系のシャハーブ族がいたのだが、この両者の間の相剋は非常に長い期間にわたり存在した相剋の延長線上にあった。

そしてカアブ族とシャハーブ族は、我々が既にその章で知った様に、カリフのアブー・バクルの時代の初期に、ペルシャ人達に対して攻撃を仕掛けたカイス・ブン・マクシューフ・アルムラーディを支援していた。そしてこの相剋は、ムアーウィーア・ブン・アビー・スィフヤーンを初めとするウマイヤ朝の何人かのカリフの時代に起きた様に、ペルシャ人達が統治の座に就いた時、もしくはイエメン諸州をムダルの人々（訳者注：イエメンの部族名なのだが、“Lugat Mudara”に「アラビア語」という意味があるので「アラビア人」のことを指すのかもしれない）が統治し、彼等が前述の両者の均衡を保持していた時を除いて、歴史を通じて静まる事はなかった。

それ故にアブドルマダーン族のアリー・ブン・アッラビーアが統治を始めた時、ペルシャ人達とアブドルマダーン族並びにシャハーブ族の両者の間の摩擦が新たなものになったのである。そして我々が既に知った様にハマー・アッラハバを巡って両者の間で相剋が発生したのである。

しかしながら、ペルシャ人達はイエメンにおいて、土地の所有者にもならず、農耕にも従事しなかった。彼等は貿易や鉱山業そして州や県等の行政に携わっていた。アッバース朝のカリフ、ハールーン・アッラシードの時代のイエメンにおいてハマード・アルバルバリーの

総督時に両者の間で相剋が生じたのだが、この相剋の理由は、アルハーリス・ブン・カアブ族の男に依ってペルシャ人の一人が殺害され、当時のサヌアールの裁判官であったペルシャ系のヒシャーム・ブン・ユーセフ・アルアブナーイーがペルシャ人の報復の正当性を認める裁定を下した事に端を發した。

ヘジラ暦136年アブー・アルアッパース・アッサファーフが死亡し、彼の兄弟であるアブー・ジャアファル・アルマンスールが彼の後を継いだ時、アリー・ブン・アッラビーアを5ヶ月しか総督の座に留め置かなかった。

そして彼の後継者として彼の兄弟のアブドッラー・ブン・アッラビーアを任じた。この男は、イエメンにおける反アッパース朝の革命の鎮圧に失敗した理由で、イラクへとイエメンを出発したのであった（注5）。そしてイエメンには彼の代理として息子を任じた。そして彼の息子は、カリフのアブー・ジャアファル・アルマンスールがイエメンの総督として派遣したマアン・ブン・ザーイド・アッシャイバーニーがやって来るまで、彼の代理を遂行していた。

マアンの派遣は、イエメンにおけるアッパース朝の統治に反対する運動の鎮圧とハドラマウトにおけるハワーリジュ派の拠点を抑圧するためであった。

（注5）：「イスラーム下のイエメン」Dr. イサーム・アッディーン・アブドルーフ・アルファッキー
ー P.73

ところで、ムハンマド・アミーン・サーリフ博士は次の様に述べている。「カリフのアルマンスール・ブン・アルアッパースはマアン・ブン・ザーイド・アッシャイバーニーを総督の地位に就け、イエメンで反乱を行った者等を鎮圧する為、派遣した。更にマアンに命じて、アブドッラー・ブン・アッラビーアを捕縛し、その財産を没収させた。アルマンスールはマアンに対してアッラビーアが齒向かうのを案じたからであった。マアンはヒジュラ暦142年にサヌアールに到着し、この事を実行した（注6）。

（注6）：「イエメン・イスラーム史」Dr. ムハンマド・アミーン・サーリフ P.112

マアン・ブン・ザーイド・アッシャイバーニーはイエメン人に対する抑圧と虐待に精力を傾けた。アブドッラー・ブン・アッラビーアの拘束と財産没収後に、マアンが行った悪事の中で最も酷いものの一つは、サアダ地方のサアド・ブン・ハウラーン・ブン・アマルの一族であるアマル・ブン・ザイド・アルガーリビーと戦い、サアダの北方にあるワーディア地方のマンダジュという地に於いて、彼を殺害してしまった事である（注7）。

（注7）：「イエメン・イスラーム史」Dr. ムハンマド・アミーン・サーリフ P.113

ハウラー一族全員がマアンに対して乖離の門戸を開く事になったこの事件の真相は、分からず終いであった。前述のアルガーリビーが殺害された事で、次にサアダ地方に於いて、マアン・ブン・ザイドに抵抗して戦った者には、アルガーリビーと最初は敵対関係にあったムハンマド・ブン・アッバーニ・アルハンフリー・アルヒムヤリーなる人物とラビーア一族があった。

ところでラビーア一族とサアド・ブン・ハウラー一族との間には、伝統的対立があったのである。これらサアダの諸部族の間に見られる対立関係は、アッバース朝の総督達の権力に対するイエメン的インティファダ（蜂起/原意：敵を一掃する事）の特徴であった。

またこの事は、マアン本人とマアン出自の家系の者とマアンが任命した諸地域の拠点に詰めるマアンの代理人達とに抵抗して、イエメン人達が蜂起した原因を倍増したのであるが、マアンの代理人達はイエメンの人々を冷酷無情に虐待したのであった。マアンに対するこれらの蜂起の中で最も顕著な例として挙げられるのは、ハジャルに住むムアーフィル族に依る、彼等の総督であり、マアン・ブン・ザイド・アッシャイバーニーの従兄弟スレイマーニ・アッシャイバーニーの殺害、そしてジュンド族の蜂起とハドラマウトの人々がマアンの総督を殺害した事であった。

これらの一連の蜂起運動に遭ってマアンは、ムアーフィル、ジュンド、ハドラマウトの各部族を襲撃し、これらの地域一帯の部族を懲罰した。そしてイエメンにおける統治に当たって6年間圧政と暴政を敷いたのであった。

その後カリフのアブー・ジャアファル・アルマンスールはマアンをイエメンからサジェスターンへ配置換えした。このマアンの配置換えの際に、サジェスターンまで同行する事が出来たのはハドラマウト出身のムハンマド・ブン・アマル・ブン・アブドッラー・ブン・ムハンマドと彼の兄弟であった。そしてこの2人は、マアンが殺害した彼等の父親の復讐として、またハドラマウトの人々の中でマアンに殺害された者達の復讐として、マアンをその家で殺す事が出来たのであった。

またこの上述の二人はイエメンに帰り着く事も出来た。ハドラマウトの人々は彼等を英雄扱いで出迎えた。そして人々はムハンマド・ブン・アマルをハドラマウトの首長とした。歴史家達は、カリフのアブー・ジャアファル・アルマンスールが、マアンがイエメンの人々に圧政と暴政の限りを尽くした事に満足した、と結論付けている。この事はアルハズラジーが述べている物語にも散見出来る（注8）。

（注8）：「鑄造された黄金」 アルハズラジー P. 26

「ハドラマウトはマアンに対して蜂起した。そこでマアンは彼等の元に赴いた。マスール（恐らくハドラマウトに存在するのであろう）の涸れ川にある干し葡萄の側を通った。彼が目にした物は彼の目に非常に素晴らしい物と映った。そして彼の代理人に対して次の様に言った。

この干し葡萄の代価として金貨で1万枚以外は彼等から受け取ってはならない。そこで彼等は彼の元から立ち去らず、とうとう彼は彼等の為に金貨1000を減額してやった。そこで彼等は、10分の1税を集め、金貨1万枚が集まった。それで彼は総督に9000枚を与え1000枚で彼等のモスクを建立した。

マアンがハドラマウトにやって来た時に、彼等と幾つかの小競り合いを起し、その死者数は15000人にも上った。そして人々はその事を重大事と捉え、そしてこの事を話し合った。それはクライシュ族の或る男がアッバース朝のカリフであるアブー・ジャアファル・アルマンスールにこの様に語る程であった。

即ち「ああ信者達の長よ、マアンがハドラマウトの人達に対して行った事を御存じないか、彼は殆ど彼等を抹殺しかけたのですぞ」。アルマンスールは彼に言った「ああ若き同胞よ、アンサール（メディナの支援者）である汝の部族の中で、宗教的に純粋な者について我に伝えよ。私は彼等が預言者モスクの奥詰まりの柱の後ろで礼拝を沢山行い、崇拜の為に彼等の顔色が黄色くなってしまった事を知っている」。

すると彼は言った「カディードの日（虐殺の日）にハワーリジュ派の連中が彼等を殺してしまいました」。アルマンスールは言った。「それでは崇拜に関して畏敬の念を抱く様な人物で、前述の様にモスクの奥詰まりの何処かの柱の後ろで礼拝を沢山行っている善き行いの人物を我に伝えて欲しい」。

するとその男は言った「カディードの日に殺されてしまいました」。アルマンスールは言った「それでは正しき家柄（預言者ムハンマド）の一族の中で、某の一族の事を我に伝えて欲しい。運命は彼等に何を為したかと言う事を」。

その男は言った「カディードの日に殺されてしまいました」。するとアルマンスールは、メディナの顔役達の中のムハージル（移住者）とアンサール（支援者）等の事や彼等の中の非常に信仰心の篤い者達やモスクから出たことのない者達そして名士達の事を彼に質問し始めた。

その男は言った「カディードの日に殺されてしまいました」。即ちハワーリジュの手に掛かって。するとアルマンスールは彼に言った。「ああ若き同胞よ、汝はマアンがハドラマウトの人々の中の何某を殺した事で糾弾出来ようか？もう汝等の（ハドラマウトの人々の宗派であるハワーリジュ派に対する）復讐は完了したのだから」。するとそのクライシュ族の男

は黙ってしまった。

つまりアブー・ジャアファル・アルマンスールは、この話の中にある様に、彼のイエメン総督であったマアン・ザーイダ・アッシャイバーニーがハドラマウトの人々に対して為した事に満足していた。たとえ彼がマアンに対してハドラマウトの人々をその様に取り扱う事を命じていなかったにせよ、である。

確かにハドラマウトの人々に罪はなかったし、またカディードのハワーリジュ派と関わった訳でもなかったが、彼等はハワーリジュ派の連中がイスラーム諸州の様々な地域にもたらした基本概念をまた掲げたのであった。

勿論全てのハドラマウトの人々が、ハワーリジュ派の基本概念を掲げたわけでもなかった。その事でもハドラマウトの人々に罪はなかったが、彼等はマアンが彼等を統べるために任じた総督に反旗を翻した。それは彼が彼等に対して圧政と暴力と暴政を成したが故であった。

カリフのアブー・ジャアファル・アルマンスールは、イエメンにおける総督マアン・ザーイダ・アッシャイバーニーの後任として、アルハッジャージュ・ブン・アルマンスールを任じ、その後アルフラート・ブン・サーリム・アルウンシー（もしくはアルアバシー）を任じた。

それからアルマンスールは彼の後任として、彼の子供であるアルマハディの母方の叔父であるヤジード・ブン・マンスール・ブン・アブドッラー・ブン・シャンマル・ブン・ヤジード・アルヒムヤリーを任じた。

カリフのアブー・ジャアファル・アルマンスールがヘジュラ暦158年に死亡した時、彼の子供であるアルマハディが彼の後を継ぎ、上述の彼の母方の叔父であるヤジード・ブン・マンスールを一年間その地位に留めた。そしてイラクの人々と大巡礼を行う為に、イラクへと召喚した。そしてヤジード・ブン・マンスールはイエメンにおける彼の代理としてアブドルハーリク・ブン・ムハンマド・アッシャハービーを任じた。

そしてヤジード・ブン・マンスールがイエメンを出発して僅か1ヶ月半後に死亡した時、カリフのアルマハディーは彼の代わりにラジャー・ブン・ローフ・アルジャザーミーを任命した。そして彼の後任としてその11ヶ月後にアリー・ブン・スレイマーン・ブン・アリー・ブン・アブドッラーブン・アルアッバースを任じた。彼は一年後にイラクへ向けてイエメンを離れる事になる。それは11ヶ月後に彼の後任として、カリフのアルマハディーがワーシウ・ブン・アスマをイエメンにおける彼の代理者としたからであった。そしてアルマハディーは彼の後任として、7ヶ月後にマンスール・ブン・ヤジード・アルヒムヤリーを任じた。

それから1年後にこの人物の後任としてアブドッラー・ブン・スレイマーン・アンナウフ

リーを任じている。アルハズラジーは次の様に述べている（注9）。「彼はハディースを語るのに優れていた。このハディースはアーイシャからアルワへ、そしてアッザハリーへと語られたものであった。そして同様にマクフルからジャービルへそしてヤジード・ブン・ヤジードへと語られたハディースを語るのにも優れていた」。

それから1年10ヶ月後にこの人物の後任としてスレイマーン・ブン・ヤジード・ブン・アブドッラー・ブン・アブドルマダーン・アルハーリシーを任じた。

（注9）：「**铸造された黄金**」 アルハズラジー P.27

カリフのアルマハディーがヘジュラ暦169年に死んだ時、彼の息子のアルハーディが後を継いだ。彼はイエメンに一年間、アブドッラー・ブン・ムハンマド・ブン・イブラーヒーム・ブン・ムハンマド・ブン・アリー・ブン・アブドッラー・アルアッバースを任じた。

それから彼の後任としてイブラーヒーム・ブン・スレイマーン・ブン・ウクバ・ブン・ムスリム・アルバーヒリーを任じた。

カリフのアルハーディが死んだ時、ヘジュラ暦170年に彼の息子のハールーン・アッラシード（注10）が後を継いだ。彼はイエメンに彼の母方の叔父に当たるアルガトリーフ・ブン・アターを総督として任じた。

（注10）：カリフのハールーン・アッラシードの時代に（イスラーム法学の4学派の開祖の一人である）イマーム・アッシャーフィーがサヌアールへやって来た。彼はサヌアールの法官のヒシャーム・ブン・ユセフやミトラフ・ブン・バーザン、イスハーク・ブン・ラーハワイヒヤアフドラッザーク・ブン・アッサアール・アビー・ヤアコブ・アッダブリーの元に知識求めに行った。特に最後の人物に関して、アッシャーフィーは次の様に述べている。「サヌアールは避けては通れない。たとえ旅が長かろうが。我々は法官の元へ赴く。ダブルの村へ」。この村はサヌアール県に在ったのだが今日その存在は明らかな形では残っていない。

3年後にアルガトリーフ・ブン・アターがイラクへ戻り、アッバード・ブン・ムハンマド・アッシャハービーをイエメンにおける彼の代理とした。（注11）アッバードはアッシャハーブ族の歴史上最初の人物であると考慮されており、彼にはサヌアールのモスクの水飲み場を建設し、サヌアールの多くの人々に対して、水を与えた、という美談があった。この事は、特にアッバード・ブン・アルガムル・アッシャハービー、（彼はアッバース朝時代のアッシャハーブ族の第2番目の人物であると考慮されている）が、イエメン総督であるムハンマド・ブン・ハーリド・ブン・バルマクに対して、バルマク家の水路から水を取り出し、彼（アッバード・ブン・アルガムル・アッシャハービー）の領地を通過する際に、前述のアッバード・ブン・ムハンマド・アッシャハービーの水場に注ぐシャフラ（小さなカナート（地下水路）

を分岐する事を条件として課した後の事であった。そしてサヌアーの人々はムハンマド・ブン・ハーリドの高貴な行為は、「アッバード（彼の名を冠した水路）」即ち彼がモスクに建設し、川から水路を水場へと繋げた事なくしては完了しない、と言ったのである。

(注11): 「イエメン・イスラーム史」 Dr. ムハンマド・アミン・サーリフ P.117

それからカリフのアッラシードはアルガトリーフ・ブン・アターの後任としてアッラビーウ・ブン・アブドッラー・ブン・アブドルマダーン・アルハーリシーを総督として任じた。

そして1年後にはアッラシードはアッラビーウの後継者として、アーシム・ブン・アトバ・アルガッサーニーを総督として任じた。

そしてまた同様に1年後に、アッラシードはアイユーブ・ブン・ジャアファル・ブン・スレイマーン・アルアッバーシーを後継者とした。

そして1年後に、前述のアッラビーウ・ブン・アブドッラー・アルハーリシーを戦争と宗教上の諸事に関して、またザカー（喜捨）の徴税に関してはハーシム族の首長であるアルアッバース・ブン・サイードの両名をアイユーブの後継者とした。

それからカリフのアッラシードは2年後に両名に代えて、ムハンマド・ブン・イブラヒーム・アルハーシミーを後継者とした。そして彼にヘジャーズ州を加えた。ムハンマド・ブン・イブラヒームはヘジャーズに居を構え、イエメンには彼の息子のアルアッバースを代理者とした。

「イエメン概説史」第2巻 [イスラーム史] P.56～P.68